

Title	中世における時間の表わし方 : 古期フランス語に見る時制の用法
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	Gallia. 50 P.75-P.84
Issue Date	2011-03-03
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/5094
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

中世における時間の表わし方 —— 古期フランス語に見る時制の用法 ——

春木 仁孝

0. はじめに

中世文学、ひいては中世における時間概念がどのようなものであったかというような内容の論攷や解説記事のほうが、この記念号のテーマにはよりふさわしい物であるかとも思うが、そのようなテーマは筆者の守備範囲外である。そこで本稿では、言語システムの中でも最も時間と関係する動詞の用法を取り上げ、中世のフランス語、より厳密には古期フランス語 *ancien français* における時制のあり方と時間の表わし方について見ていくことにする。豊かな内容を持つフランス中世文学を今後、読んでみようとする人の助けになるように、現代フランス語とも比較しながらその大まかな姿を記述紹介することをめざす。その際、言語研究者としての筆者の考えも可能な範囲で盛り込みながら古期フランス語の動詞の時制システムのあり様を明らかにしたい。なお、用例は主として13世紀の散文作品を中心とするが、必要に応じてその他の作品も参照した。

1. 物語的現在

春木(2006)でも見たように散文作品においては物語的現在(以下PH)が多用されていた。繰り返しになるが、そこでの説明をまとめておこう。MÉNARD(1988)では、PHは主として主文および関係節において、重要な時点 *moments importants*、行為の転回点 *tournants de l'action* (登場人物の到着と出発 *arrivée ou départ d'un personnage*、直接話法の導入 *introduction du style direct*、劇的緊張感のある場面 *passage de tention dramatique*、戦闘の場面 *description de bataille*, etc.)などで使われると説明されている。それ以外にもたとえばBURIDAN(2001)では、急速な行為を表わす場合なども付け加えられているが、これは上記の緊張感のある場面や戦闘の場面とも重なるだろう¹⁾。

まずは戦闘場面におけるPHの実例から見てみよう。(イタリックの動詞がPH、その他の時制の動詞は下線を引いてある。)

- (1) Et li autre qui après venoient commencierent a trebuschier paveillons

1) MÉNARD(1988)では、韻文作品では音節数をあわせるため、また散文では文体に変化をつけるために時制の選択が行なわれているとも記しているが、このような説明に関しては筆者は懐疑的にならざるを得ない。もっともMÉNARDもその本の補遺で時制の混在に関して *chez les bons auteurs il n'y a nul désordre*. とも書いており、結局は各時制の使用の原則に則った上で許される範囲で、上記のような時制の選択が行なわれていたと言いたいのだろうと好意的に理解しておこう。

et tres et a occire genz et metre par terre quanqu'il *aconsivent*. Adont *commence* li criz et la huee parmi l'ost si grans que l'en n'i *oïst* neis Dieu tonnans ; si *queurent* as armes cil qui *est*oient *desarmé* ; et messire Gauvains, quant il *voit* que la chose *est* a tant *allee*, si *commande* que l'en li *aport* ses armes hastivement ; et cil qui il *fu* *commandé* li *aporterent*. (*La mort le roi Artu*, p.146)

「そして後から来ていた者は大きなテントも小さなテントもひっくり返し人々を殺し行き当たるもの総てを地面に倒し始めた。その時、敵方の間には大声があがりそのあまりの大きさにたとえ雷が鳴っても聞こえなかっただろう。武具を外していた者達は武器を探し回った。そしてゴーヴァンは事態がそのようになってしまったのを見ると、急いで自分の武具を持ってくるようにと命じた。そして命じられた者はゴーヴァンに武具を持っていった。」

第1文では *commencierent* と単純過去が使われている。2行目の *aconsivent* から PH になる。ゴーヴァンの *commande* まで PH が続き、最後の文でまた単純過去になっている。戦闘場面への導入が単純過去で書かれ、戦闘とそれに気付いて慌てふためいて武器を探すアーサー王側、つまりランスロ側にとっての敵の人たちの行動と、攻撃に気付いて戦闘の準備をするゴーヴァンの様子が PH で描かれ、盛り上がった緊張感が最後の単純過去で少し押さえられるという流れになっている。背景的な描写をする関係節の中は主文が単純過去であろうと PH であろうと半過去が使われている。それ以外の下線部分は接続法である。この後、例 (2) で示すようにアーサー王自身の戦闘準備がまた PH で書かれ、王の行動の最初が単純過去で書かれた後、またゴーヴァンの行動が PH で書かれるというように、単純過去と PH が交互に用いられて話が続いていく。

このような中世フランス語における単純過去と PH の交替に関して春木 (2006) では次のような傾向が認められることを指摘した。

- | | | |
|---------------|-----|---------------|
| 物語的現在 | : | 単純過去 |
| a) 主要な登場人物 | vs. | その他の登場人物 |
| b) 主要な場面 | vs. | 背景の場面・つながりの場面 |
| <同一人物の行為に関して> | | |
| c) 重要性のより高い行為 | vs. | 重要性の低い行為 |

そして、それに対して認知言語学的な観点からの説明を試みた²⁾。すなわち、行為連鎖における重要な部分が PH で書かれ、さらにその部分に隣接する箇所もある程度の重要性を持つので PH で書かれる可能性が高い。どこまで PH による記述を広げるかにおいては書き手の判断や好みが入り込んでくると考えられる。書き手の判断の中には前後の文脈における時制とのバランスや文体的変化なども入ってくるが、結果としての時制の交替はここで述べているような原則に反するものに

2) 春木 (2006) では様々な場面を取り上げ、具体的に PH と単純過去や他の時制との交替を詳しく分析したので、参照にされたい。

はならないはずである。

いずれにしろ PH は行為連鎖の中の重要な事態をプロファイル、前景化するために用いられているのであり、効果としては迫真性、切迫感などを生み出す³⁾。MÉNARD (1988) などが列挙する場面は結局は行為連鎖において重要性を持ちやすい場面を類型化したものであるが、そのように個別的に捉えていたのでは一連の流れの中での時制の交替を的確に説明することはできない。

上の例 (1) に続く部分をもう少し見てみよう。

- (2) Et li rois meismes *se fet armer* a grant besoing, (...) .Et si tost comme li rois fu montez entre lui et ceus que entor lui estoit, il vit que ses paveillons chéi a terre, et li dragons qui seur le pommel estoit, et li autre paveillon; et tout ce fesoit Boorz et Hestor qui vouloient prendre le roi. Quant messire Gauvains *voit* la merveille qu'il fesoient, si les *moustre* au roi et *dit*: «Sire, vez la Boort et Hestor qui vos font cest damage.». (*La mort le roi Artu*, p.146)

王自身も急いで武具を装備させた。王と王の周りの者が馬に乗るや、王は自分たちのテントがその上につけてあった旗印とともに打ち倒され、他のテントも同様なを見た。これらすべては王を捉えようとしていたボオルトとエトールのなすところであった。その二人の目覚ましい働きを見たゴーヴァンはそれを王に示し、王にこう言った。「殿、こんな損害をあなたになしているボオルトとエトールをご覧ください。」

ここで注意してほしいのは、2度使われている *voir* という動詞である。アーサー王を主語にしている場合は単純過去形に、ゴーヴァンを主語にしているところでは PH になっている。先に述べた原則では、重要な場面や重要な行為は PH で書かれることが多いと述べたが、そのような場面では多くの場合、典型的な他動詞や、また自動詞であっても主語が意志や意図を有している動詞が用いられる⁴⁾。そのような観点から見ると *voir* というのは他動詞であっても、働きかけのない動詞である。従って PH になっていなくても理解できる。実際アーサー王はテントが倒されていくのをおそらく啞然として見ていたのである。ではどうしてゴーヴァンを主語にした箇所では PH になっているのだろう。ゴーヴァンは敵の二人の仕業を見て怒っているのであり、この言葉を発した後すぐさまエトールに向かっていくのである。つまり同じ *voir* という動詞であっても、ゴーヴァンを主語にしている場合は次の行為を引き起こす原因となっており、対象への具体的な働きかけはなくともよりメンタルコンタクトが強いのである。それが *voir* が PH で用いられている理由である。

例 (1) と例 (2) を見ただけでも、PH の使用が認知的に説明の出来る一定の原則に従っていることは明らかであろう。

3) 類似の効果を持つ物語的半過去は中世においては未だ未発達であった。

4) 典型的な他動詞というのは、目的語で表わされる対象に働きかけて対象の変化を引き起こす他動詞としてプロトタイプ的な動詞のことである。

このように、古期フランス語で書かれた散文物語で物語的現在が多用されていたのだが、一方、20世紀後半から現在形による小説が増えてきているということをおもひ起こすとこれは興味深い現象である。日常会話においても過去の出来事は複合過去を混在させながらも主として現在形で語られることを考え合わせると、語りにおける現在形というのは実はフランス語の歴史の中で連続と維持されてきた特徴なのかもしれないと思わせる。

2. 半過去

上記の引用(1)の中にも *si queurent as armes cil qui estoient desarmé* という部分の関係節の中に半過去の例がある。主動詞は *querre* (探す) の現在形である。この例の様に PH で書かれている文脈においても、先行詞の属性描写をする関係節の中は基本的には半過去で書かれている。半過去の機能については、特に春木(2000)でその基本的な機能は属性付与であることを詳しく論じた。その際にも古期フランス語の例を引いて、この属性付与機能が既に古い時期にも見られることを示した。(2)はそのときに引用した例である。

- (2) *si tornent en fuie por garantir leur vies si comme il puent et s'adrescent vers une forest qui pres d'ilec estoit a meins de deus liues englesches;...*

(*La mort le roi Artu*, p.256)

「そして彼らは命からがら必死で逃げ出し、そこから2里も無いところにあった森へと向かった」

- (3) *Le chevaliers du pont, ki grans estoit et de merveilleuse forche, laisse courre vers Keu d'Etraus par desus le pont, ausi ravineusement com se li foudres le cashast, et le fiert en son venir si durement k'il abat le cevalier et le ceval desus le pont, l'un d'une part et l'autre d'autre, puis s'en revait outre et, quant il a son poindre parfurni, il s'en retourne la u il estoit au commencement. (*Tristan en prose* T.I, p.67.)*

「背が高くてすばらしい力を持っていた橋の騎士は橋の上をエトローのキューに向かってまるで稲妻に追われているかのような速さで馬を走らせ、出会い頭にキューを激しく打ち、騎士も馬も橋の上に打ち倒して駆け抜け、走り終えると、最初にいた場所に戻った。」

例(2)では逃げる騎士たちの行動が PH で書かれており、先行詞を「森」とする関係節で半過去が用いられている。この半過去の部分は森の位置づけを行っており、森の属性を記述しているのである。例(3)は全体が PH で書かれている中に半過去が2箇所出てくるが、最初の半過去は橋を渡ろうとする者に戦いを挑む「橋の騎士」の様子を描写しており、これまでの例と同様の関係節における典型的な半過去の用法である。一方最後の文の半過去は、現在と対比された過去の状態を述べる半過去であり、現代フランス語の用法と同じである。

属性付与機能が前面に出ている関係節における半過去の使用は、PH が形は現在であっても過去の事態を述べていると考えれば理解できる。つまり半過去は対象

の過去における属性を記述するのである。従って、以下の現代フランス語の例のように、大過去で書かれている文内の要素に対する属性記述にも半過去が用いられているのと本質的には同じ現象であると言える。

- (4) Ce matin au supermarché, j'avais choisi une caisse que je *croyais* la plus rapide, et en fait, c'était la plus lente. (*L'ami de mon amie* 一部変更)

半過去に関しては、初期のフランス語においては未だ話の背景などを受け持つという機能が未発達であったという記述が文法書には見られる。その証拠として MÉNARD (1988) は、『ローランの歌』の最初の 500 行に出てくる半過去は 3 例に過ぎないのに、12 世紀末の Chrétien de Troyes の作品になると、たとえば『エレクトとエニッド』の最初の 500 行には半過去は 40 例以上見られるようになると言っている。そして、上で見たような『アーサー王の死』のような 13 世紀の散文作品ではほとんど今日の半過去と変わらない姿を見せるようになる。確かに、次例に見られるように今日ならば半過去が用いられるところに単純過去が用いられているのを見ると、古期フランス語においては主文における半過去の機能は未だ発展の途上にあったようにも思われる。

- (5) Ce *fu* au tans qu'arbre foillissent. (*Perceval*, 69)

「それは木々に葉が生い茂る季節であった」

- (6) Grand pieche *jut* Peliners a tere puis k'il fu abatu, en tel maniere que nus ne le veüst adonc ki ne quidast vraiment k'il fust mors.

(*Tristan en prose* T.II, p.169)

「ベリネールは打ち倒された後、長い間地面に横たわっていた。彼を見た者は誰であれ彼が死んでいると思わない者はいないような様子で。」

MÉNARD によれば、今日であれば半過去が期待されるところに現われる単純過去に用いられている動詞は être や avoir など動詞自体が状態を表わすものが主であり、動詞の内面的アスペクトが単純過去が持たない継続的なアスペクト価を補っているのではないかと述べている。確かに例 (6) でも *gesir* 「横になる」という状態を表わす動詞が用いられている。しかし、古期フランス語で出会う多くの半過去の例は今日と殆ど変わらないものである。(5) (6) のような半過去に替わって用いられているように見える単純過去の例は、状態を表わす限られた動詞や限られた構文に見られる古い用法の名残ではないかと思われる。というのも、以下の例からも分かるように (5) に類似する表現や、*gesir* の単純過去は古期フランス語の作品ではよく目にするものだからである。

- (7) Ce *fu* en mai el novel tens d'esté; / Florissent bois et verdissent cil pré,

「それは初夏の 5 月のことだった / 森には花が咲き草原は緑におおわれていた」 (*Prise d'Orange*, 39-40)⁵⁾

- (8) Ce *fu* en mai, el novel tens d'esté: (*Charroi de Nîmes*, 13)

いずれにしろ、古い時代に状態を表わす動詞が動詞本来のアスペクト価によ

5) 例 (7) の *cil pré* の *cil* は古期フランス語に見られたいわゆる周知の指示形容詞と呼ばれるもので、特定の草原を指示しているわけではない。

て時制のアスペクト価を補うことができたということは、これは現代フランス語の有様とは逆である。今日では、例えば *connaître* や *savoir*、あるいは *avoir* など状態的な意味を表わす動詞が単純過去や複合過去に置かれると、「知った」、「手に入れた」というように時制の持つアスペクト価が優先されて意味が変わる。この点で、初期のフランス語は現代フランス語とはやや異なっていたようである。

3. 複合過去

ところで例文 (3) の最後の文には複合過去が用いられている。

- (9) *quant il a son poindre parfurni, il s'en retourne la u il estoit au commencement.*

「彼（橋の騎士）は走り終えると元の場所に戻った」

この例の様に複合過去は事態の完了とその結果状態を表わすというアスペクト的な機能を持っていた。同様の機能を果たしている他の例を見てみよう。

- (10) *Quant il sont trusc'au pont venu, li cevaliers ki le pont gardait estoit ja montés sour son ceval tous garnis et tous aparailliés de ferir.*

(*Tristan en prose* T.I, p.66)

「彼らが橋のところまでやって来ると、橋を守っていた騎士は戦う準備をすっかり整えて既に馬に乗っていた」

- (11) *Quant il a ces deus cevaliers abatus en tel maniere com je vous cont, il s'en retourne esramment ariere (...).* (*Tristan en prose* T.I, p.68)⁶⁾

「彼はこの二人の騎士を私が語ったように倒すと、急いで元にもどった」
いずれも < quand 事態 A の完了 → 事態 B > という同じ形式で、二つの事態の連鎖を表わしており、複合過去がアスペクト的に用いられているのがよく分かる。『散文トリスタン物語』では上例の言い回しは一つのパターンとなっている。次例は異なる構文であるが、やはり複合過去はアスペクト的である。

- (12) *Ensi chevaucent tant k'il sont au pas venu u li .XXX. cevalier estoient ki atendoient que Lancelos i venist.* (*Tristan en prose* T.II, p.112)

「このようにして彼らは馬を進め、ランスロがそこに来るのを待っている 30 人の騎士がいる峠へとやって来た」

tant que は結果を表わす接続詞であり、移動動詞が到達点と共に結果を表わす従属節で用いられるという、これは典型的な完了アスペクトの環境である

やはりアスペクト的な機能として、複合過去が行為の急速な完了を表わす場合もあり、そのような場合は *tost* や *isnellement*, *erramment* その他の「すぐに、素早く」といった意味を持つ副詞を伴うことが多い。次例はフランス語訳も含めて BURIDANT (2000) からの例である。

- (13) *L'anfes Girars avale les degrez,*

6) この例では助動詞と過去分詞に挟まれた直接目的語に過去分詞が数の一致をしているが、目的語と過去分詞の一致は必ずしも目的語が過去分詞に前置されていないなくても起こりえた。また *être* を助動詞に取る動詞の過去分詞は、主語が男性（名詞）の場合は 2 格体系に従って格と数の一致が起こるので現代フランス語とは一致の様子が異なっている。

En la cuisine en *est moult tost aléz* (*Ami et Amile*, 2259-60)
 (Le petit Gérard descend l'escalier, se précipite dans la cuisine)

「子供のジェラルは階段を下りると急いで台所へ入った」

さらに、複合過去には現代フランス語におけるように単に現在とは切り離された過去の事態を述べていて、単純過去と全く同じ役割を果たしていると考えられる場合もある。以下も BURIDANT (2000) が引用する例である。

(14) Vers le palés *est alés*; / Il en monta les degrés,
 En une canbre *est entrés*, / Si commença a ploere
 Et grand dol a demener (*Aucassin et Nicolette*, VII, 6-10)

「彼は宮殿の方に向かった。そしてその階段を登った。彼は部屋に入り、泣き始め悲嘆に暮れた」

単純過去と同じ価値を持つ複合過去の用例には、主として移動を表わす動詞が多いと指摘されている。この例でも、*est alés*, *est entrés* という移動動詞が複合過去で用いられ、*monta*, *commença* という単純過去形と交互に現われていて、四つの動詞の価値は同じであると BURIDANT (2000) 考えている。

確かに (13) (14) の例の複合過去は単純過去と同じと考えてよいと思われるが、微妙な違いもあるのではないか。偶然かもしれないが、(13) の *avalér* 「下る」と (14) の *monter* 「登る」は同じように移動動詞と思われるがいずれも単純過去で用いられている。一方 *entrer* 「入る」は *en la cuisine*, *en une canbre*, また *aller* は *vers le palés* と到達点を伴っている⁷⁾。到達点を伴う動詞句は必然的に完了的である。完了的である場合が複合過去になっているのは偶然とは思えない。(13) (14) の例においては単純過去と複合過去の例には時制としての実質的な違いは殆どないと言えるが、アスペクト的には微妙な違いが残っていると考えられる。そして、このような場合から単純過去と同じ価値を持つ複合過去の用法が拡大していったとも考えられる。

ただし、移動動詞に限らず単純過去の価値に相当すると思われる複合過去が作品によっては多用されている場合もある。以下はそのような例をとして MÉNARD (1988) が注で挙げている『ルイ王の戴冠』からの複合過去である。

(15) Maint colp *reçut* et plus en a rendu; (*Le couronnement de Louis*, 1218)

「彼はたくさん打たれたが、それ以上に打ち返した」

recevoir と *rendre* が複合過去で用いられているが、文脈から見て特に完了アスペクトを表わしているとは考えられない。それどころかこの例の前後を見てみると、単に過去の事態を表わしているだけと思われる複合過去が頻出している。

(16) Le reis Galafres *est* de son tref *issuz*;
 A lei de rei est chalciez et vestuz; (1189-90)

「ガラフル王はテントから出た。彼は王らしい靴と服を身につけていた」

7) *vers* は「の方へ」と方向を表すと考えると到達点ではないが、文脈から見て宮殿に到達しているのは明らかなので、ここでは到達点を表わしていると解釈出来る。因みに *avalér* と *monter* の目的語の「階段」は単なる経路である。

Guillelmes a le temolte *entendu*; (1201)

「ギヨームは騒ぎを聞いた」

Guillelmes *s'est el premier renc tenuz*: (1206)

「ギヨームは最前列に身を置いた」

Le cuens Bertrans *s'i est molt chier venduz*.

Après sa lance *a trait le brant molu*;

Cui il ataint jusqu'el piz *l'a fendu*. (1214-16)

「バルトラン伯はしっかり戦った。槍の後にはよく研いだ剣を抜いた。
行き会った者を胸まで断ち割った」

Et Guielins *i a maint colp feru*, (1219)

「そしてギヨームはそこでおおいに（敵を）打った」

(15) の例の前後を見ただけでも幾つも複合過去の例を見つることができる。確かに移動動詞もあるが、*entendre*, *se vendre*, *traire*, *ferir* など移動とは関係のない動詞も多い。『ルイ王の戴冠』は写本はともかく作品は12世紀前半に成立したと考えられているので、『アーサー王の死』や『散文トリストラン物語』などよりかなり時代的に遡る作品である。そこでこれほど現代的な感覚の複合過去の例が多い理由はよく分からないが、一つには、物語と武勲詩というジャンルの違いが関係しているように思われる。物語と違って、武勲詩では基本的に次々と出来事を語っていく。つまり完了した事態の上に次々と新たな事態を重ねていくのである。従ってそのような事態の連続においては、先の事態は完了したという側面が強く前面に出てくるのである。そのことが複合過去の使用を促すのではないかというのが、考えられる仮説である⁸⁾。

最後に、複合過去に関して *morir* という動詞の用法について触れておく。この動詞はもちろん「死ぬ」という意味であるが、< *avoir* + 人 + *mort* > という複合時制の形で用いられると「殺した」という意味になる。これは起源的には *avoir devant soi qn. qui est mort* 「死んだ人が目の前にいる」という意味であるが、中性フランス語では「殺した」と同じ意味で理解される。用例は多い。

(17) *Mort as mun filz (Roland, 3501)* 「おまえは私の息子を殺した」

4. 前過去

中世フランス語の作品と現代フランス語の作品を比べた場合に目に付くのは、中世においては前過去の頻度が非常に高いことである。先ず実例を見てみる。

(18) *Après la Pasque au tens nouvel que la foiture fu auques departie, semont le rois touz ses barons et apareilla ses nes por passer la mer;*

(*La mort le roi Artu*, p.166)

「復活祭の後、寒さも幾分か去った春に王は総ての家臣を招集し、海を

8) もう一つ考えられるのは、韻文では脚韻もしくはアソナンスにおいて、過去分詞を利用することができるというのはかなりの利点であるということである。古期フランス語の語順から言って、複合時制の過去分詞は文末ひいては行末に持っていきやすい。ここで引いた例が属する連は -u(-) で韻を踏んでいる。

渡るための船を準備した」

この例では、<前過去 - PH - 単純過去>という連続になっている。たとえば SANTUCCI の現代語訳では、この箇所は<大過去 - 単純過去 - 単純過去>という連続になっている。現代フランス語におけるような、直前完了、急速完了を表わすだけではなく、過去における完了アスペクトを表わすのが中世フランス語における前過去の機能であった。そして、単純過去に替えて PH が用いられるところから、例 (18) のような<前過去 → PH>という組み合わせがよく見られる。PH に対する完了は既に見たように複合過去でも表わせるので、このような環境では複合過去と前過去が競合しているというのが古期フランス語の姿である。

次例は大過去と並んで用いられている例である。

- (19) Quant tuit li clergié qui la estoient venu orent fet le sevised tel comme li durent, li rois Artu revint en son palés et s'asist entre ses barons (…).

(*La mort le roi Artu*, p.133)

「そこへやって来ていた司祭たち総てがふさわしい儀式を終えると、アーサー王は官殿に戻り家臣達と共に腰を下ろした」

このように並んで用いられていると、大過去が時間的先行性を表わし、前過去が完了アスペクトを表わしているのがよく分かる。

5. その他

そのほかに注意するものとしては、<aler + ジェロンディフ>という事態の進行・持続を表わす迂言形式がある。(20) のように動きを伴う場合もあるが、例 (21) のように必ずしも動きを伴っていないまでも用いられる。

- (20) Endementiers qu'il aloit chevalchant par ses viles et sejornant de jor en jor par ses chastiax la ou il les savoit muez aiesiez, (…).

(*La mort le roi Artu*, p.165)

「彼（アーサー王）が自らの領地の町から町へと馬で巡り、非常に快適に過ごせると知っている領地内の城に次々と泊まり歩いている間に (…)」

- (21) Car chevalcez ! Pur qu'alez arestant? (*La Chanson de Roland*, 1783)

「さあ馬を進めろ。何をぐずぐずしているのだ」

この例では arester (=s'arrêter, tarder) という動きを表わさない動詞の現在分詞と aler が組み合わされており、事態の持続を表わしているのがよく分かる。

最後に、soloir という習慣を表わす専用の動詞があったことに触れておこう。

- (21) Cele nuit dormi mesire Tristan mout durement, car le grans travaux qu'il avoit le jour devant sousfert, qui l'avoit lassé, le fist dormir plus fermement k'il ne soloit. (*Tristan en prose* T.II, p.162)

「その夜、トリスタンはとてもぐっすり眠った。なぜなら前の日にした大変だった事が彼を疲れさせ、いつも以上に彼をしっかりと眠らせたからだ」

6. 結論にかえて

ほぼ一千年前に書かれた源氏物語の完成度に比べると、中世フランス語で書かれた作品の完成度はやや落ちると言わざるを得ないだろう。しかし、源氏物語は世界の文学史の中でも例外的な位置を占めるものであり、中世フランス文学も残された作品の多さやジャンルの多彩なことなど、これもやはり世界の文学史の中では特筆されるべきものである。今日では、多くの研究者達のたゆまぬ努力により、校訂されて簡単に入手できる作品も多い。特に近年、優れた長編の散文作品が数多く校訂出版されたことは、中世フランス文学へのアクセスがより容易になったと言える。中世フランス語を読むには、綴り字が一定していないだけでなく、時代や地方により綴り字や語形にいろいろと違いがあることを初め、いくつかの関門がある。動詞の時制や法の用法が今日とは違っているのもその一つである。法についてはテーマ外であるので触れなかったが、仮定など非現実な事態が主として接続法半過去で表わされるというのも古期フランス語の大きな特徴であり、慣れる必要がある。しかしこういった関門を超えて、アーサー王やランスロといったケルト伝説の英雄達が活躍する世界を原文で読むことは、現代フランス語を学んだ者に対して MÉNARD (1988) を初めとする「地図」と共に特権的に用意されている、洞窟の奥に隠された快樂なのである。

(大阪大学大学院教授)

引用作品

Ami et Amile, éd. P. F. Dembrowski CFMA (1926) Paris : Champion

Aucassin et Nicolette, éd. Mario Roques CFMA (1973) Paris : Champion

La Chanson de Roland, éd. G. Moignet (1989) Bordas

Le Charroi de Nimes, éd. D. McMillan CFMA (1972) Paris : Champion

Le Couronnement de Louis, éd. E. Langlois CFMA (1925) Paris : Champion

La Mort le roi Artu, éd. J. Frappier TLF (1964) Genève : Droz

La Prise d'Orange, éd. Cl. Régner CFMA (1972) Paris : Champion

Le Roman de Tristan en prose, éd. Ph. Ménard TLF (1987) Genève : Droz

参照文献

Buridant, Cl. (2001) : *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, SEDES.

Ménard, Ph. (1988) : *Manuel du français du moyen âge, 1. syntaxe de l'ancien français*. Bodeaux : SOBODI.

春木仁孝 (2000) : 「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo. 一半過去の属性付与機能について」『フランス語フランス文学研究』第 17 号、pp. 84-95

春木仁孝 (2004) : 「事態認識の方策としての半過去 — 絵画的半過去を中心として —」『言語文化研究』第 30 号、pp.229-251.

春木仁孝 (2006) : 「古フランス語における物語的現在と半過去についての序章」『シュンボシオン 高岡幸一教授退職記念論文集』 pp.33-42.